

シスフヒなどの言葉、皆これ語助なり、古時野の字讀てナといひし如きは、ノといひ、ナといふは轉語なり、また古語にナと云ひしは無也、莫也、其義あるなり、さらば野をノといひし事は、其平遠曠濶の義なるに似たり、凡風めるものを伸しぬれば長し、また蹙めるものを蹙して平になすをもノスといふ、其義并に同じ、

〔倭訓采乃編二十三〕の野をよむも、彼此相通ふ意ありて、之字に通へり、えぞにぬふといふのはら野原の義也、野は卑く、原は高くして、曠平なるをいふ也、

〔古事記傳三〕凡て野をば、古は怒と云り、能と云はや、後のことなり、師の云く、野、角篠、忍、凌、樂などの能は、古はみな怒と云り、故古書に此等の假字には、能乃などをば用ること無くして、みな奴、怒、農、濃などを用ひたり、農、濃などはヌの假字なり、ノに非ず、凡て右の言どもを能と云ことは、奈良の末つかたより、かつく始れりと云れたるがごとし、

〔雅言集覽三十一〕の野、萬葉には、大かた野ともよめり、まれにはのともよめり、其例十八、九、廿、夏、能之、同十七、七、志乃、備加禰都毛、同八、多流比賣野、うらをこぎつ、同十八、五、おほなむちすくなひこな野、神代より、同卷中外に四つあり、

〔類聚名物考 地理二十〕のら野

野といふにラをそへて、語の助とせしなり、萬葉集に子をら妻をらとも、又家らともいへり、

〔夫木和歌抄一〕家集戀歌中

俊頼朝臣

君をこそあささはのらにをはぎつむまづのをふさのまみ深く思へ

〔徒然草上〕心のまゝにまげれる秋の野らは、おきあまる露にうづもれて、むしのねかごとがましく、やり水の音のどやかなり、

〔八雲御抄三上〕野

春野 夏 冬 やけ かれ あづまの すそ かげ のち のはら だく

の、冬 ともきのと云 あさぢ すゝのまのやなどいひつれば、野はある也、ふせやとは、の